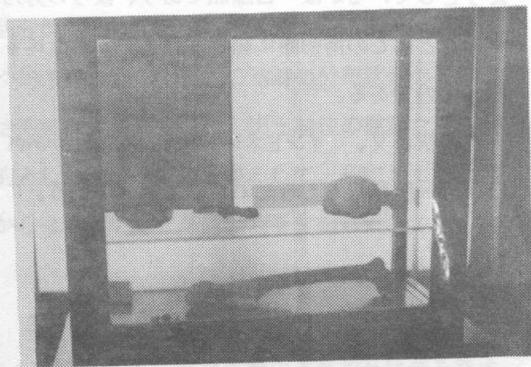


ジャカルタの国立博物館見聞記

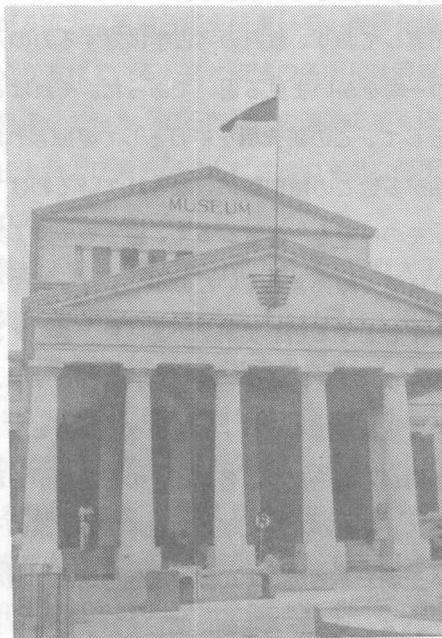
利 光 正 文

世界的に有名なピテカントロプス・エレクトス＝ジャワ原人の骨（第1図）を展示した国立博物館（Museum Nasional）は、ジャカルタのほぼ中央、西ムルデカ通りにある。正面前広場にタイの国王から贈られたという大きなゾウの銅像が置かれ、パルテノン宮殿を思わせる円形の柱を正面入口に配した白造りのこの博物館（第2図）は、なかなかの偉容を誇っている。私はこれまで二度、即ち5年前の8月東南アジア数ヶ国を旅行した折と、タイのバンコクで開かれたアジア歴史学者会議（I. A. H. A.）に参加の後、再度インドネシアまで足を伸ばした一昨年の8月にここを訪れたことがある。以下、記憶をたどりながら、私の見てきた範囲内でこの博物館について若干の紹介をしてみたいと思う。

さて、原始人類の一つであるジャワ原人の骨が、別に金庫の中に厳重に保存されているわけでもな



第1図 ジャワ原人の骨

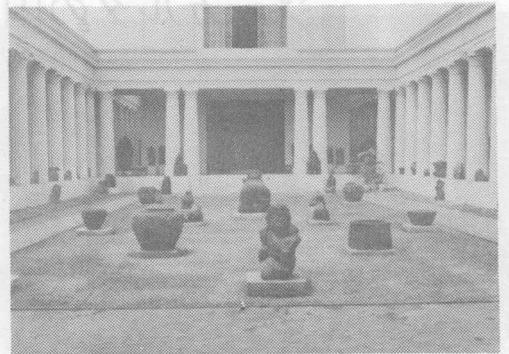


第2図 博物館正面

く、かくも無雑作にと言えば失礼だが、自由に見ることが出来ることにある種の驚きを覚えながら、人類の進化の過程に思いを馳せて、しばし眺めていたのが、この博物館見学の始まりであった。しかし、当館の価値は、世界的な財産を展示しているということだけに留まらず、全国各地から集められたさまざまな文化遺産を豊富に収めているという点でもある。周知のように、インドネシアはヒンドゥー、仏教、そしてイスラムの各文化の渡来を受け、それぞれのすばらしい遺産が残されて

いるという文化的・美術的に大変恵まれた国であるが、最近では考古学者の活躍によって、それらの全貌が次第に明らかになりつつある。偶然、バンコクでの会議中にインドネシア国立考古学研究所の研究員アンバリ氏と知り合いになり、同研究所を見学させてもらう機会を持ったが、非常に内部が充実しており、政府の考古学に対する力の入れ方の一端をかいま見る思いであった。それはとも角として、この研究所を中心として発掘された出土品が多数この博物館に収蔵されているわけである。その中でも一番数が多く、廊下や中庭(第3図)にまで陳列されていたのが、シヴァ神像や仏像を中心とする石造美術品であった。あのアンコール・ワットに匹敵するといわれるボロブドゥールの大仏教遺跡やロロ・ジョングランのヒンドゥー遺跡からの一部や、各地出土の石造物がそれらである。それから更に、中心はイスラム系のマタラム王朝であるが、その他の王朝の遺品も展示されている。マタラム王朝に関しては、ジョクジャカルタの王宮に展示館があり詳しく知ることが出来るが、ここでも見れるわけである。以上の様な歴史上の遺物に加え、幾多の島々に点在する数十にもものぼる多くの種族の中で、主要な、又は特に珍しい種族の伝統的な衣装及び彼らの生活用品等も陳列されており、多様性に満ちたインドネシアの現状をうかがい知ることが可能となっている。

加えて、この博物館には図書館も併設されている。私が二度目に訪れた時の目的の一つは、この図書館収蔵の、私が現在研究している「ムハマディーヤ」 というイスラム改革主義団体が発行した古い新聞を写真に取ることであったが、係の人



第3図 博物館の中庭

々は皆親切であり、心よくこの申し出を聞き入れて協力してくれた。勿論、写真一枚につきいくらというおまけはついてはいたけれども。それと、当図書館は小じんまりしているが利用者はかなり多く、特に外国人の姿がよく目につき、冷房のきいていない暑い部屋の中で熱心に勉強している様子には感心させられた。

ともあれ、建物は立派であり、内容も充実しており、しかも図書館まで附設されているこの博物館は、どの国のそれと比較しても全く遜色がなく、まさに一級品である。独立して間もない新生インドネシアが祖先の文化遺産をいかに大切に保存しようとしているかは一目瞭然であり、彼らの努力がみごとにこの博物館に結晶されているようにも思えるのである。

この次、又、インドネシアを訪問する機会があれば、今一度私はここを訪れたいと考えている。